

雑報

第一回日中太陽物理討論会 (1st Sino-Japan Seminar on Solar Physics—1991年3月1日~10日)

太陽物理学研究における日中国際協力の一環として上記の国際研究集会在中国云南省昆明で開催され、日本人11名を含む約50人の日中の太陽物理関係者が出席した。日本からは日江井、平山、久保田、椿、吉村、北井、末松、一本、川上、牧田、秋岡の11名が参加した(7名は文部省国際学術研究による派遣、4名は中国科学院の招待)。

2月27日飛行機の都合で、大阪発の5名はさきに北京に着き、Ai Guoxiang氏等の出迎えを受けHuairou観測所の新型マルチチャンネル太陽磁場望遠鏡を見学した。これは、光球及び彩層のベクトル磁場、速度場、H α 、K線、HeI 10830等が、1秒程度の空間分解能で同時に観測できるもので、調整が済んで本格的に運用が始めれば、世界最強の太陽観測機器の一つになるであろう。翌日は密云の電波干渉計を見学し、成田出発チームと北京で合流し、翌日、北京天文台から出席する面々とともに民航機で昆明へ向かった。昆明では、云南天文台のDing教授らスタッフによる出迎えを受け研究会の会場である保養地白魚口へ案内していただいた。研究会は3月1日から4日まであしかけ4日間おこなわれ、レセプション、論文発表、両国の各天文台の現状と将来計画の報告、今後の日中協力についての議論など盛りだくさんな討論が展開された。中国の天文学は、いまだ発展途上であるとの認識を持っていたが、彼らの太陽研究にかける熱意には圧倒されるものがあり、さらに政府からの財政的な支持も手厚いものである様子がうかがえた。一般に中国の太陽物理学者は、40代の働き盛りの年齢層が研究者としてのいちばん重要な時期に研究を中断させられており(悪名高き文革)、そのせいで現在の中国の天文学は世界的レベルに達しているとはいえない状況である(もちろん頭脳流出組は非常に優秀な業績を上げているようである)。しかし、現在の若手、院生らの研究に対する熱意には驚かされるものがあり、文革などという悲劇が再び起こることのない限り、近い将来日本を追い抜いて世界の一流の水準に達するかもしれない。

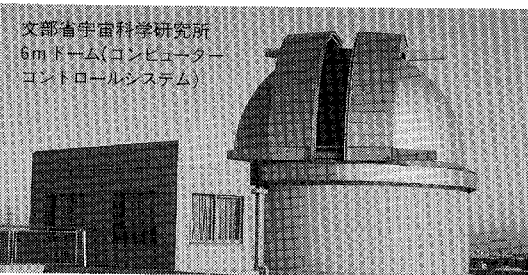
研究会が終わった夜は、打ち上げのダンスパーティが行われた。中国の若者は皆社交ダンスが好きで若者にとって大切な出合の場になっているようである。日本組の若者は社交ダンスなどできるわけもなく、壁の華(?)となるもの、やけくそでひたすら笑いを取ることにしらざるを得ないものなど出会いも何もない惨憺たる状況であったが、昭和ひとけた生まれの先生方は大はりきり

で若い頃鍛えられた腕を披露されていた(特に三鷹の両H教授)。翌日からは、エクスカージョンで中国の少数民族で有名な秘境、西双版纳(シーサンパンナ)へと一同揃って遊びにいった。ここでの3日間で一同楽しく、美しい思い出をたくさん作り、大いに国際親善に尽くした。しかし、余り詳しく書くと、遊んでばかりいたように思われるので、内緒。翌日、昆明にかえり、云南天文台の太陽観測施設を見学、今後の研究観測協力を約して集会を終えたのであった。特に1993年に次回“討論会”を日本で開けるよう努力することになったが、白魚口のような会場、西双版纳へのようなエクスカージョンに見合うお返しと考えると雲の上の話になりそうである。

今回の研究会には事情があってわが国の太陽電波グループから参加できなかったが、中国のミリ秒パーストの研究層は厚く、有望と思えたので、今後の交流に期待したい。また中国の太陽観測衛星への意欲は相当あるようでポストSolar-Aを考える上で重要な点となる。中国は隣国、太陽の同時観測を行える国として今後益々交流を深めていく必要がある。“討論会”のプロシーディングは印刷中である。(秋岡真樹+牧田 貢)

ASTRO Observatory Domes

天文台の建設は青少年の未来の心をはぐくみます



◆主な天体観測ドーム納入先◆

文部省宇宙科学研究所/東京大学教養学部/宮崎大学教育学部/東京学芸大学/埼玉大学/福島大学/川崎市青少年科学館/杉並区立科学教育センター/駿台学園一心荘(北軽井沢)/防衛中学校/東海大学宇宙情報センター(熊本)/日原文天文台(島根)/尾鷲市立天文科学館(三重)/葛飾区郷土と天文の博物館等の他全国に数多くの実績があります。

ASTRO 光学工業株式会社

〒170 東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(3985)1321